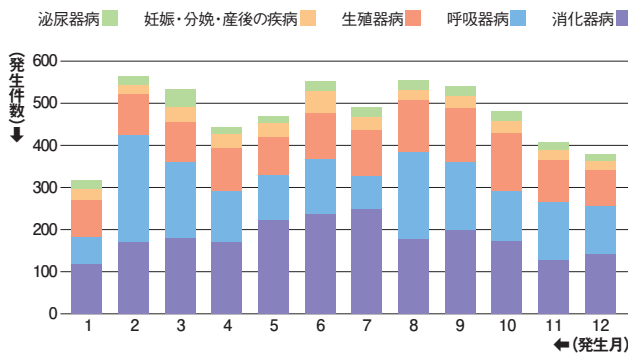
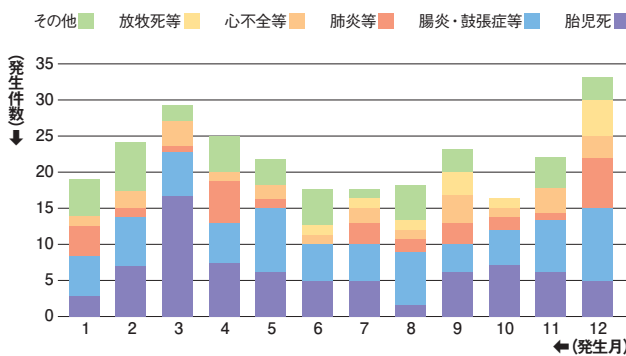


肉用牛の過去3年間の 疾病事故状況とその特徴

H18 病傷事故発生件数



H18 死廃事故発生件数



立会いをしていただき、分きたいことです。分娩時と発情鑑定は年間の家畜管理の中で最重要ポイントであるということ、を改めて強く認識していただきたいと思えます。

第二点の特徴は平成18年度に肺炎が31頭（死亡事故総数の11.7%）と死亡・廃用事故原因の第3位に増加

結果には必ず原因がある
① 病傷事故
 何と言っても「消化器病」即ち「子牛の下痢」が年により多少の変動はありますが、毎年病気総数の約1/3を占めていることであり、更に「呼吸器病」（主に肺炎）を加えると約60%にもなるということ。ただ、消化器病自体は低下傾向にあり（37.1→34.3%）、生産者の皆様の予防ワクチン接種

等の予防管理努力の成果が遅々としてでは有りますが、実に効果を上げてきているものと確信します。
 子牛の下痢と肺炎を防止できれば、肉用牛特に繁殖和牛においては皆様の貴重な管理時間を繁殖だけに集中できることとなります。決して不可能なことではありませんので、予防に関する情報等、はかりつけの獣医師若しくはNOSA-家畜診療所に

お問い合わせ下さい。
予防に勝る治療なし
② 死亡・廃用事故
 第一点は毎年原因のトップは胎児死（新生児死を含む）であり、これは母牛の分娩時の事故や所謂虚弱児等に拠るものです。自らの所有の繁殖母牛と種牡牛の血統組み合わせを検討することが先ず第一であり（種牡牛によっては重大な疾病因子を保有している）、次に分娩時には必ず

してきましたこと。背景にはこの3年間呼吸器病の発生がジリジリと増加してきたことが上げられます。呼吸器病の発生には様々な因子が関与しますが、気候の変動も大きく影響する要因の一つです。実は、特に冬季の家畜の「風邪」関係の原因ウイルスの動きは人間の「風邪」原因ウイルスの動きとほぼ同様の動きの傾向があることを我々NOSA-東南部・家畜診療所の調査で明らかとなっております。岩手日報朝刊（毎週日曜日）の県内総合ページ「感染症発生動向調査情報」欄が大変参考になります。例えば前の週に比べてインフルエンザとかウイルス性胃腸炎が増加しているような時は要注意ということ、即ち皆様の家畜も「風邪」原因ウイルスに曝される危険性が増しているということ（但し感染するウイルスは種特异性という人間と家畜では通常全く異なります）。